

札幌圏の日ロ交流と学生ボランティア通訳者育成 — 札幌大学ロシア語専攻における取組み —

飯田 梅子

はじめに

日本政府観光局（JNTO）の統計によると、2014年度の訪日外国人旅行者数は約1340万人（うちロシアからの訪日客6万4077人）で、このうち来道者数は約154万人（うちロシアからの来道者1万2800人）を記録した。¹ 特筆すべきはロシアからの来道者数の伸び率で、過去10年間の訪日客数と来道者数を比較すると、前者は5万人から6万人前後で足踏み状態であるのに対し、後者は5900人から1万2800人へと倍増している。最近5年間のロシアからの来道者数は1万人以上で安定しており（東日本大震災の発生した2011年を除く）、今後さらなる伸びが期待される。

北海道にとってロシアは地理的に最も近い外国であり、他の都府県と比して歴史的に緊密な関係を築いてきた。近年、ロシアは北海道にとってますます重要性を増しており、道内では産学官民が連携して極東地域（サハリン州、ハバロフスク地方、沿海地方）との経済交流の促進、善隣関係の醸成に取り組んでいる。

本学は北日本で唯一のロシア語専門課程設置大学として、1967年の開学以来ほぼ半世紀にわたり、地域における日ロ交流を支える人材を輩出してきた。本稿では、近年のロシア語専攻における教育カリキュラム、正課外活動、日ロ交流における学生の地域貢献活動を概観し、通時的総括を試みる。そのうえで、専攻カリキュラムとOJTの有機的連動に向けた課題を指摘し、有用な解決策を導きだすことをめざす。

1. 専攻カリキュラムと正課外活動

開学以来、専攻では少人数教育の伝統が継承されてきた。² ネイティブ教員による1年次の会話授業は長年2クラス編成で運営されたが、受験者数がピークに達した1991年度には4クラスに改編された（相馬 2000:211）。その後も定員数の増減に応じた柔軟なクラス編成が実現され、少子化時代を迎えた近年も、個々の学生へのきめ細かな指導体制が維持されている。

教員主導の教育カリキュラムを側面から補強するのが学生主体の専攻行事、交流事業、正課外活動である。これらの場では、教室で積みあげられた受動的知識を能動的知識へと

転ずる機転と柔軟性が求められる。カリキュラムとこれらの活動は相補関係にあり、どの学習段階でどの行事に参加させるかによって、以後の学習者の目標が左右される場合もある。以下に、本専攻のロシア語教育カリキュラム、専攻行事、交流事業を瞥見する。

(1) ロシア語教育カリキュラム

① 1 年次

1 年次には初級文法、初級会話、ロシア学入門知識を修得する（表 1）。予復習を習慣化し、小テストや定期考査による到達度の確認作業を徹底する。到達目標はロシア教育省認定ロシア語検定試験（以下、TRKI）の入門もしくは初級レベル合格、ロシア語能力検定試験 3 級合格を目安とする。

入学式翌日の専攻ガイダンスで命名式が執り行なわれ、新入生全員にロシア名が授けられる。³ ネイティブ教員は学生をロシア名で呼び、学生間や教員間の連絡にも広く活用される。初回授業アンケートで進学動機や関心の対象が把握され、教員間の情報共有により授業内容に反映される。

カリキュラムと並行して、ロシア詩の集い、ロシア語合宿、ヨールカ祭などの行事、ノボシビルスク日本語青年訪問団交流、青少年サハリン・北海道「体験・友情」の船などの交流、北方四島交流スピーチコンテスト、全道ロシア語弁論大会などの各種コンクール初級部門への参加が推奨される。これらの活動をつうじて日々の学習成果を確認する。

表 1 1 年次専門科目

専門科目	概要	区分	単位	コマ数	期別
ロシア語入門 I, II	初級文法	選択	5	週 5	春秋
基礎ロシア語 I, II*	初級会話	選択	2	週 2	春秋
ロシア事情 A	地域研究	必修	4	週 2	春
ロシア事情 B	文学・文化	必修	4	週 2	秋

* ネイティブ教員担当科目

② 2 年次

2 年次には前年に修得した初級文法、初級会話の知識を深化させ、読解、作文、聴解、会話の 4 技能をバランス良く発展させる（表 2）。多くの授業で講読が課せられ、中級以上の文法知識が要求される。専門ゼミナールでは、1 年次に学んだロシア学入門の知識を発展させる。到達目標は TRKI 基礎もしくは第 1 レベル合格を目安とする。

行事では実行委員会を組織し、運営や進行を担当する。同級生との連携力、下級生への

指導力、上級生の助力を仰ぐ交渉力が鍛えられる。青少年サハリン・北海道「体験・友情」の船でのサハリン訪問、各種コンクール上級部門への出場が期待される。多くの学生が2年次に学外研修（モスクワ短期留学研修）に参加する。⁴

表2 2年次専門科目

専門科目	概要	区分	単位	コマ数	期別
ロシア語文法	中級文法	必修	4	週2	春
ロシア語作文	中級文法	必修	4	週2	秋
ロシア語会話 I, II*	中級会話	必修	4	週2	春秋
ロシア語演習 I, II	中級講読	選択	4	週2	春秋
ロシア語発展演習 A, B	中級講読	選択	4	週2	春秋
言語論 I, II	言語学概論	選択	2	週1	春秋
専門ゼミナール I, II	ゼミナール	必修	2	週1	春秋
ロシア文化社会論（集中）	文学・文化	選択	2	15	秋
学外研修*	短期留学研修	選択	4	52	秋

* ネイティブ教員担当科目

③ 3～4年次

3, 4年次にはロシア語の専門知識や高度な運用能力を修得し、ロシアの文化、文学、歴史、政治、経済についての専門知識を深化させる（表3）。到達目標はTRKI第1～第3レベル合格、ロシア語能力検定試験1～2級合格、通訳案内士（国家資格）試験合格を目安とする。

行事では下級生の模範となり、専攻全体を導く役割が期待される。ロシア語合宿を主宰し、下級生向けの授業を運営する。ボランティア通訳活動への積極参加、各種コンクール上級部門での上位入賞が期待される。中長期留学を実現し⁵、高いロシア語運用力をいかした進路選択（公務員、ロシア関連企業就職、大学院進学など）が期待される。

表3 3～4年次専門科目

専門科目	概要	区分	単位	コマ数	期別
ロシア語学研究 A, B	形態論、統語論	選択	4	週2	春秋
ロシア語作文研究	上級文法、翻訳	選択	4	週2	春
ロシア文学講読 A, B	文学講読	選択	4	週2	春秋
ロシア史	歴史、社会	選択	4	週2	春
ロシア外交論	外交、政治	選択	4	週2	秋
現代ロシア語表現研究 A, B*	上級会話	選択	4	週2	春秋
時事ロシア語研究*	上級ロシア語	選択	4	週2	春
日ロ翻訳論*	上級ロシア語	選択	4	週2	春
ロシア文学研究 A, B*	文学講読	選択	4	週2	春秋

専門ゼミナール III～VI	ゼミナール	必修	2	週 1	春秋
ロシア文化社会論（集中）	文学・文化	選択	2	15	秋
学外研修*	短期留学研修	選択	4	52	秋
認定留学	中長期留学研修	最大 30 単位振替可能			通年

* ネイティヴ教員担当科目

(2) 専攻行事，交流事業，正課外活動

上述のように，カリキュラムに沿った学習と並行して，修得知識の実践の場である専攻行事，交流事業，正課外活動などが隔月ペースで実施される（表 4）。むろん行事の設定や選択は無作為ではなく，学習期間や修得内容に応じた動機づけが意図され，参加をつうじて日々の成果を確認できる仕組みづくりが心がけられている。ここではまず年間の実施プログラムを瞥見し，その具体的教育効果を考察する。

表 4 専攻の年間行事

実施時期	専攻行事，交流事業，正課外活動	学年	実行委員会
4 月下旬	新入生歓迎会	全学年	2 年生
7 月上旬	ロシア詩の集い	全学年	2 年生
7 月中旬	ノボシビルスク日本語青年訪問団交流	1 年生	
8 月上旬	青少年サハリン・北海道「体験・友情」の船	1, 2 年生	
夏期休暇	ロシア語合宿	全学年	4 年生
9 月上旬	北方四島交流スピーチコンテスト	全学年	
11 月下旬	全道ロシア語弁論大会	全学年	
12 月中旬	ヨールカ祭	全学年	2 年生
通年	ボランティア通訳活動	3, 4 年生	

① 新入生歓迎会

4 月下旬，2 年生が実行委員会を組織し，企画，会場手配，予算確保，案内配布，買出し等の事前準備を担当する。歓迎会ではボルシチ，ピロシキ，ロシアの伝統菓子などが準備され，新入生は食を通じてロシア文化に触れる。また，学外研修や中長期留学の報告，スライドショーによる行事紹介を受け，4 年間の学生生活の展望を持つ。

② ロシア詩の集い⁶

7 月上旬に開催され，学内外から 100 名ほどの来場者がある。初心者向けの「ロシア詩暗唱コンクール」には，1 年生，基盤科目「ロシア語 I」履修生，他大学や一般の初級ロシア語講座履修生など約 20 名が出場する。1 年生はネイティヴ教員による発音や朗読の

指導を受け、自分の「持ち詩」を得ることとなる。

コンクール後、高大連携先の新陽高校生徒によるリレー朗読や寸劇につづき、本専攻、北海道大、北海学園大、札幌市立大、教育大の学生や留学生によるロシア詩朗読、語劇、合唱などが披露される。最後に市内在住ロシア人による詩の朗読、プロの音楽家によるミニコンサートなどが催され、参加者は詩、文学、音楽などを通じてロシアの豊饒な芸術世界に触れることとなる（山田 2013:59）。

③ ノボシビルスク日本語青年訪問団交流⁷

7月中旬、姉妹都市ノボシビルスク市の日本語青年訪問団を迎え、1年生を中心に文化交流を行う。ネイティブ教員の特別授業、訪問団員によるロシア語指導、日ロ混成チームによる勝ち抜きかるた大会をととして、国際交流の楽しさ、実践の難しさを体験する。入学後3カ月が経過した1年生のための異文化交流入門行事に位置づけられている。

④ 青少年サハリン・北海道「体験・友情」の船

8月上旬、道とサハリン州が隔年で往復する「体験・友情」の船が実施される。1年生5名前後が大学生交流に参加し、翌年は代表団員としてサハリン州を訪問する。ホームステイや文化交流の中で学習成果を確認するとともに、ロシア語を解さない参加者のサポート体験を通じて異文化交流における橋渡しの重要性を認識する。教室では学生本人の意思伝達力向上に主眼が置かれるが、現場では他者のコミュニケーションをサポートする場面が多く、学生は通訳業務の面白さと難しさを実感する。

⑤ ロシア語合宿

夏期休暇中に実施される。1985～2012年度までの28年間は、道内各地の宿泊施設において4泊5日の日程で実施された。ロシア語講座、文学講読、学習成果発表会などの勉強会のほか、ロシア料理ショー、合唱、コンサート、ゲーム大会、交流会、さよならパーティーなどのイベントが企画される。期間中は学生による日刊ロシア語新聞が発行される。

2015年度は規模を縮小し、学内セミナーハウスで4年生主宰の合宿が実施された。ネイティブ教員、長期留学経験者が講師をつとめ、手づくりの合宿を実現した。⁸先輩の授業を受講した下級生は大いに触発され、将来の具体的目標を得たとの感想が寄せられた。

⑥ 弁論コンクール

（北方四島交流スピーチコンテスト）9月上旬、札幌圏で日本語研修を受けた北方四島

在住ロシア人による日本語スピーチコンテスト、および市内在住のロシア語学習者によるロシア語スピーチコンテストが実施される。主に1, 2年生が出場し、上位入賞を果たしている。終了後に茶話会が催され、札幌市民と北方四島在住ロシア人が直接交流する。学生は北方領土問題に対する日ロ双方の見解に触れる。

(全道ロシア語弁論大会) 11月下旬、日本ユーラシア協会北海道連合会、北海道、サハリン州の主催による「全道ロシア語弁論大会」が開催される。伝統的に専攻生は各部門で上位入賞を果たしている。⁹ 上級A部門出場者には5分スピーチ、質疑応答、詩の暗誦が課せられる。初級B部門では3分スピーチが審査の対象となる。学生はネイティブ教員による発音、表現力の指導を受け、本番の舞台で大きく成長する。

⑦ ヨールカ祭

12月中旬、ロシアのクリスマスパーティー「ヨールカ祭」が開催される。2年生が実行委員会を組織し、1年生と協力して運営を担う。会場設営、広報活動、案内送付、買出し、調理など、全て学生による手づくりのイベントで、2015年度で32回を数える。例年、地域住民をはじめ、学内外で150名ほどの来場者があり、ボルシチ、オリビエサラダなどの伝統ロシア料理が振舞われる。語劇、マジック、プロの音楽家による演奏、合唱、踊り、ビンゴゲームなどのプログラムが用意され、参加者はロシアの芸術文化に直接触れる。

以上、専攻カリキュラム、専攻行事、交流事業について概観したが、多くの学生にとって大きな目標であり、4年間の集大成となるのがボランティア通訳活動である。次節で詳しく検討しよう。

2. 学生の地域貢献とボランティア通訳活動

従来、学生の社会活動は専攻ホームページ等で概略報告されることはあっても、細部が省察されることはなかった。¹⁰ 10年以上にわたり蓄積された経験を個別体験に終わらせず、長期的人材育成につなげるために総括しておきたい。

以下に、おもな学生ボランティア通訳活動の実績を紹介する。

(1) 学生ボランティア通訳者派遣実績

札幌圏を中心とした日ロ交流の現場で、本専攻生がコミュニケーションの架け橋となった例は数多い(表5)。¹¹ ボランティア通訳活動は、職業選択に直結するOJTの絶好の機会であり、参加した多くの卒業生が道内外の日ロ交渉の現場で活躍している。

表 5 学生ボランティア通訳者派遣実績

年度	月日	事業名	受入機関	派遣数
2002	7-10 月	自治体職員協力交流事業	札幌市総務局国際部交流課	10 名
2003	7.1-9.19	自治体職員協力交流事業*	札幌市総務局国際部交流課	11 名
	11.14	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 札幌市立平岡中央小	1 名
2004	6.21-9.17	自治体職員協力交流事業*	札幌市総務局国際部交流課	11 名
2005	2.26-3.5	スペシャルオリンピックス冬季世界大会・長野		1 名
	5.17	北方四島交流日本語習得研修	北方四島交流北海道推進委員会	1 名
	7.15-22	北方四島交流青少年受入事業*	北方四島交流北海道推進委員会	7 名
2006	7.15-22	北方四島交流青少年受入事業*	北方四島交流北海道推進委員会	5 名
2007	7.7-14	北方四島交流青少年受入事業*	北方四島交流北海道推進委員会	5 名
2008	7.17-22	北方四島交流青少年受入事業*	北方四島交流北海道推進委員会	8 名
2009	3.5	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 札幌市立清田小	5 名
	6.26	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 札幌市立清田高	4 名
	7.15-20	北方四島交流青少年受入事業*	北方四島交流北海道推進委員会	7 名
2010	5.28	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 札幌市立三角山小	1 名
	7.16-21	北方四島交流青少年受入事業*	北方領土復帰期成同盟	7 名
2011	3.3	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 江別市立大麻東小	2 名
	6.3	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 札幌市立宮の丘中	3 名
	7.15-20	北方四島交流青少年受入事業*	北方領土復帰期成同盟	7 名
	7.21	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 石狩市立南線小	5 名
	12.14	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 札幌市立発寒東小	4 名
	12.15	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 札幌市立立川北小	6 名
2012	6.1	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 札幌市立東山小	4 名
	7.13-18	北方四島交流青少年受入事業*	北方領土復帰期成同盟	7 名
	11.1	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 千歳市立青葉中	2 名
	12.7	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 岩見沢市立清園中	3 名
2013	7.19	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 札幌市立本郷小	5 名
	10.25	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 札幌市立福移小	4 名
2014	10.1-8	北方四島交流受入事業	北方領土復帰期成同盟	2 名
2015	6.2	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 札幌市立平岸西小	2 名
	6.13-14	北方四島交流受入事業	北方領土復帰期成同盟	2 名
	7.2	JICA 研修員学校訪問事業	JICA 札幌 札幌市立元町小	3 名

(出所) 各事業の引率教員からの資料提供を受け、執筆者が一覧を作成した。

* はインターンシップ科目「実践演習」

上記のうち自治体職員協力交流事業と北方四島交流受入事業は、インターンシップ科目「実践演習」として 2003～2012 年度にカリキュラムに導入された。いっぽう 1 日業務の JICA 研修員学校訪問事業は、インターンシップではなく正課外活動として学生を派遣している。以下におもな活動の概要を紹介しよう。

① 自治体職員協力交流事業¹²

札幌市総務局国際部交流課を受入窓口とし、ロシア語圏からの研修員受入事業に関する通訳業務を担当した。2002年度はインターンシップ協定未締結のため、札幌市と学生の個人契約による業務となった。2003～2004年度は札幌市と専攻の間で協定書が交わされ、インターンシップ科目「実践演習」の枠内で講義や視察などの逐次通訳業務を担当した。講義内容は地方自治制度、地方公務員制度、都市経営、地方財政、地方税制、市の経済と産業振興、議会活動、市の情報化推進政策、清掃工場建設計画、ごみ資源化工場、市の火葬事業、市営バス事業など多岐にわたる。視察先はコンベンションセンター、大谷地地下鉄工場、札幌ドーム、札幌コンサートホール、生涯学習センター、エレクトロニクスセンター、中央卸売市場、産業振興センターなどである。大学院生主宰の事前学習会で、資料収集と専門用語のグロッサリー作成を徹底し、2名1組で本番に臨んだ。

② 北方四島交流青少年受入事業

北方四島交流北海道推進委員会（2010年度からは（社）北方領土復帰期成同盟）を受入窓口とし、2005～2012年度に実施された北方四島交流青少年受入事業における補助通訳業務を担当した。実施団体と専攻の間で協定書が交わされ、インターンシップ科目「実践演習」の一環でOJTに参加した。訪問団にはプロの通訳者が同行し、学生は補助通訳業務に専念した。実施団体の配慮により、プロの通訳者1名につき学生2名が研修員として指導を受ける方式がとられた（担当通訳者による助言、OJT後の評価、コメントペーパーの提出）。根室振興局1市4町での青少年受入事業終了に伴い、本インターンシップも終了した。2014年度以降は、実施団体のオファーに応じて学生を不定期に派遣している。

③ 北方四島交流訪問事業

2010～2012年度に北方四島で実施された対話集会や住民交流会の補助通訳業務を担当した。2013年度の事業見直しに伴い、ボランティア通訳者の継続派遣を休止している。

④ JICA 研修員学校訪問事業

近年派遣回数が急増している事業で、JICA 研修員の学校訪問の補助通訳業務を担当する。全校集会などの全体行事はプロの通訳者が担当するが、各クラスでの特別授業などは学生が担当する。引率教員の指導のもと、前月に学習会が招集され、資料翻訳などを通じて本番に備える（山田 2012:58-59）。

以上のように、専攻には国や地方自治体の事業へのボランティア派遣要請が多い。これまで専攻は可能な限りこれらの要請に応えてきたが、多くの課題にも直面してきた。次項では、地域の国際交流支援に伴う課題を抽出し、有用な解決策を模索する。

(2) 学生ボランティア通訳者育成の課題と展望

近年、学生の専門性を地域の国際交流に活用しようという行政機関や交流団体の気運は高まっている。しかし、学生ボランティアの受入先と派遣元の意思疎通が常に円滑に進むわけではない。本専攻のボランティア通訳活動には、大きく2つの課題が観察される。1つは育成面の課題であり、もう1つは派遣時の課題である。以下に詳しく考察する。

① 課題

第1に、育成面の課題として、高度なロシア語運用力を有する学生の安定的派遣体制の未整備があげられる。たとえば、2014年度には6件のボランティア派遣要請があったが、主力学生5名の留学不在により、人材育成の絶好のチャンスを断念せざるを得なかった。各方面からの派遣要請に安定的に対応するには、毎年3～5名のボランティア候補学生の育成が不可欠だと考えられる。

第2に、派遣時の課題として、受入先と派遣元の事前調整の不足が指摘できる。これは受入先の業務に支障をきたすばかりでなく、業務を充分遂行できない状況に置かれる学生にも精神的な不利益をもたらす。たとえば、先述の自治体職員協力交流事業では、学生ボランティアに大きな期待が寄せられ、全通訳業務が委託された。幸い、当時は留学経験のある大学院生がリーダーシップをとり、学生通訳者チームを牽引することができた。しかし、内容を精査すると、明らかにアマチュアの学生に依頼すべきでない業務が大半を占めることがわかる。当時の報告によると、入念な準備を重ねて業務を完遂した学生が大半ではあるが、資料不足、経験不足のため、受入先の要求レベルに到達できなかった者も散見されたようである。

これら2つの課題をどのように解決するべきか、次項で詳しく考察する。¹³

② 展望

専攻にとって目下最大の課題は安定的な人材育成体制の整備だが、当面の対応策として、引率教員による有望学生の早期起用が試みられている。これは1、2年生の段階で通訳業務に関心のある希望者を選出し、ボランティア派遣団に見習い通訳者として帯同させる試みで、既に一定の成果をあげている（山田 2012:59）。1、2年次に見習い通訳者として上

級生の背中を見て育った学生の多くは、早期に目標を定め、コンクールの上位入賞や長期留学を実現している。そして、上級学年で今度は自分がボランティア通訳者として後輩の模範となり、就職活動や大学院入試でも着実に目標を達成している。¹⁴ ただし、これまで得られた成果の多くは、個々の学生の努力や教員の尽力による部分が大きい。既存のカリキュラムの枠内で有望な人材を安定的に育成するには、今後ますます専攻行事や正課外活動との有機的連動が必要になるだろう。

幸い、近年の専攻内の喜ばしい変化として、学生間の互助精神の高まりが観察されている。学年間の健全な縦のつながりが早期の目標設定や自己研鑽への道筋をつくり、親密な横のつながりが不足を補完し合う建設的関係を育んでいる。面倒見の良い上級生に感化された下級生は、数年後には自ら後輩に経験を伝授する。このような流れの中で、2015年度には、新入生がロシア語同好会の結成を提案し、有志が学年横断的に立ちあげに着手した。発起人によると、自主学習会や交流イベントの企画運営を目指し、他大学のロシア語サークルとの連携も視野に入れていると言う。専攻には、古くは1972年創部の「ロシア語研究会」にはじまり、¹⁵ そこから派生した「ロシア民謡研究会」などのロシア語ロシア文化研究会が存在したが、近年は露英日学生新聞部「ユースフォーラム」がロシア語同好会の役割を兼ねる状況が続いている。¹⁶ 今後学生による自主学習同好会が復活すれば、専攻カリキュラムと正課外活動の連動効果を更に高めることが期待できるだろう（表6）。

表6 カリキュラム，行事，交流事業，正課外活動一覧

学年	カリキュラム (高度な専攻語運用 力を養う科目)	専攻行事 (動機づけ)	交流事業 (動機づけ)	ボランティア 通訳活動 (実践)	学外 研修	自主 学習
1年次 (初級)	基礎ロシア語*	新歓、詩の集い、 合宿、四島スピー ーチ、全道弁論、 ヨールカ祭	ノボシビ ルスク、 サハリン 受入	見習い (動機づけ、 適性判断)	短期 留学	ロシア 文化研 究会、 学生新 聞部
2年次 (中級)	ロシア語会話* ロシア語作文 ロシア語演習 ロシア語発展演習 専門ゼミナール	詩の集い(実行 委)、合宿、四 島スピーチ、全 道弁論、ヨール カ祭(実行委)	サハリン 訪問	見習い (動機づけ、 適性判断)	短期 留学	
3年次 (中級)	ロシア語学研究 ロシア語作文研究 現代ロシア語表現研究*	詩の集い、合宿、 全道弁論、ヨール カ祭		補助通訳者 デビュー (適性判断)	中長期 留学	
4年次 (上級)	時事ロシア語研究* 日ロ翻訳論* 専門ゼミナール	詩の集い、合宿 (主宰)、全道弁 論、ヨールカ祭		指導的 補助通訳者 (就職、進学)	中長期 留学	

* ネイティブ教員担当科目

表6は実践力を養う科目、専攻行事、交流事業、正課外活動の一覧だが、ここに学生による自主学習効果を付加したい。上述の同好会が創部されたあかつきには、補助通訳業務経験者を講師役に「通訳入門」講座を定期開催し、学生間で高まりつつある学習や社会貢献への意欲を発展させる一助となるよう期待したい。むしろ、実務経験のある教員が側面支援することは言うまでもない。

次に、派遣時の課題について考察しよう。派遣時のトラブルを回避するには、前述のように、受入先との入念な調整が欠かせない。専攻は教育機関として過重な責務から学生を保護する義務があり、負担の大きすぎる業務を慎重に見極める責任がある。その意味で、自治体職員協力交流事業はあきらかに事前調整が不十分であったと思われる、不首尾の責任は双方にあったと考えられる。高度な専門知識や通訳技術が必要な現場では、受入側は予算を確保した上でプロの通訳者を正式雇用すべきで、ボランティア通訳者のみの起用は適切とは言えない。他方、派遣元も、業務が学生に遂行可能なものなのか、万一実力が必要レベルに達しない場合に善後策をどう講じるのか、充分吟味すべきであった。仮にプロの通訳者が必要数雇用され、学生の役割が補助通訳業務に限定されていれば、本事業への協力はさらに継続可能であったかもしれない。過度の負担から学生を解放し、適切な教育効果を生み出すためにも、慎重な事前調整は欠かせない作業となる。大学は社会貢献を期待される機関であり、これまでも専攻はボランティア通訳・翻訳業務を請負ってきたが、受託の際には教育効果を最優先に考慮すべきだと考えられる。¹⁷

その意味では、北方四島交流受入事業やJICA 研修員学校訪問事業は、受入先やプロの通訳者側からも一定の理解が得られ、学生のOJTにとって理想的な現場だと言える。入念に準備を重ねた学生は、プロの通訳業務を間近に観察しながら補助をつとめる機会を得る。高い志をもつ学生にとって、このような活動はまたとない実務経験の場となり、進路選択の大きな指針となっている。

むすび

本専攻課程は上位大学と異なり、必ずしも高校時代に十分な学習習慣を身につけた学生ばかりが入学する訳ではない。しかし、全国から集う学生が互いに切磋琢磨しながら、道内、首都圏、ロシアなどでのびのびと活躍する人材に育っている。¹⁸ 彼らは札幌圏をはじめとする地域貢献の場に育てられた人材であり、専門性を地域に還元することに極めて意識的である。本専攻には今後ますます優秀な学生の安定的育成が求められるが、それは、上に見たように、教育カリキュラム、専攻行事、交流事業、正課外活動、学生の自主学習会を有機的に連動させてはじめて可能になると考えられる。

謝辞

本共同研究の第1回研究会でご講演下さった熊谷ユリヤ先生、専攻のボランティア通訳活動関連資料を快くご提供下さった山田隆先生、¹⁹ 高橋健一郎先生、鈴木淳一先生に心より御礼申し上げます。

参考文献

- 加藤光男他(2008)『札幌大学外国語学部 Youth Forum News 縮刷版』札幌大学外国語学部。
- 札幌大学 30 年史編纂委員会 (1998)『札幌大学 30 年史 1967-1997』札幌大学。
- 札幌大学十五年史編纂委員会 (1981)『札幌大学十五年史』札幌大学。
- 札幌大学総務部企画課 (1991)『札幌大学広報『藻嶺』25 年の歩み』札幌大学。
- 札幌大学創立 40 周年記念事業委員会 (2007)『札幌大学創立 40 周年記念 藻嶺 縮刷版』札幌大学。
- 篠田顕子, 新崎隆子 (1995)『高校生からお年寄りまで ボランティア通訳のすすめ』はまの出版。
- 相馬守胤 (2000)「第 IV 章 戦後のロシア語教育 大学のロシア語教育 札幌大学」日本ロシア文学会編『日本人とロシア語 ロシア語教育の歴史』ナウカ, 109-214 頁。
- 山田隆 (2012)「ロシア語あれこれ 第 15 回 ボランティア通訳が小学校を訪問する」『ユーラシア研究』第 47 号, 東洋書店, 58-59 頁。
- 山田隆 (2013)「ロシア語あれこれ 第 16 回 高校で参加できるロシア語フェスタ」『ユーラシア研究』第 48 号, 東洋書店, 59-60 頁。

-
- 1 北海道経済部観光局「訪日外国人来道者数(実人数)の推移」
 - 2 2012 年度までは、外国語学部ロシア語学科。
 - 3 ロシア名の命名は 1982 年に匹田軍次教授(現・名誉教授)の発案で導入され、1984 年に着任した故クリヴォンキナ招聘教授の指導のもとで定着した。新入生をロシア文化にいざなう最初の扉となる。
 - 4 春期休暇中、モスクワ大学附属ロシア語ロシア文化研究所(Iryaik)で 4 週間の留学研修が実施される。初級・中級クラスは会話授業、上級クラスは会話授業と選択ゼミナールを受講する(80 分授業、週 13 コマ)。放課後は市内の名所旧跡、美術館、博物館めぐり、週末は世界遺産登録地への視察旅行が予定される。参加学生は日々積みあげた語彙、文法、レアリアなどの受動的知識を能動的知識へと転換させる。大学から 4 万 2000 円の補助が給付される。
 - 5 例年 2 ～ 5 名程度の学生が、モスクワ大学附属 Iryaik などに長期留学する。学内選考試験に合格すると、認定留学生の資格が与えられる(TRKI 基礎レベル合格者は選考試験免除)。3 年次に認定留学し、帰国後に現地の取得単位を振替申請する者が多い(最大 30 単位)。授業数は週 13 コマ(80 分授業)で、基礎ロシア語、ビジネスロシア語、音声学の授業のほか、選択ゼミナール(テーマは統語論、形態論、

- 音声学, 新語, TRKI 対策, 現代ロシア文学, 文学の主人公像, 昔話論, 現代ロシア文化, 伝統工芸文化など)を履修する。例年秋には留学報告会が行われる。近年はモスクワ大のほか、ノボシビルスク大、北東連邦大(旧ヤクート大)、サンクトペテルブルグ大、プーシキン大などに留学している。
- 6 本専攻は朝日新聞社主催「ロシア語弁論コンクール」全国大会において、長年上位入賞を果たしてきた(第1位:1969, 1995, 1997, 1998, 2000年度。第2位:1986, 1996, 1999年度)。同大会の廃止(2001年)に伴い、従来の学内弁論大会を全国規模の「札幌大学ロシア語弁論コンクール」に拡大し、2002～2010年度に開催した。「ロシア詩の集い」はこのコンクールの初級部門(暗唱詩コンクール)を継承した専攻行事で、2011年度から開催されている。
 - 7 このほかの1年生対象の交流事業としては、2007～2013年度に「日ロカード交換プロジェクト」(極東連邦大とのクリスマスカード交換事業)が実施された。専攻全体の行事としては、1998～2001年度に北方四島在住ロシア人との交流懇談会が開催された。
 - 8 近年、長期留学期間中に日本語教師のアルバイトをする者も増えており、合宿での授業運営は彼らの経験披露の場にもなっている。かつての卒業生の中には、サンクトペテルブルグ大、ゲルツェン教育大、北東連邦大、ハバロフスク工科大、極東外国語大、ポーランド国立ヤギェウォ大、ウジ大などで日本語教育に携わる者もある。このほか、教職課程履修者の模擬授業と合宿をマッチングする試みなども、授業者と受講者の双方に有益な案だと思われる。
 - 9 全道ロシア語弁論大会A部門の優勝年度は以下のとおり。1969, 1970, 1971, 1976, 1977, 1985, 1986, 1994, 1999, 2000, 2007, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015年度。
 - 10 本専攻のURLは以下のとおり(2015年9月30日閲覧)。<http://www.su-rus.net/>
 - 11 古くは札幌冬季五輪(1972年)にはじまり、沿海州大学野球チーム合宿(1989年)、札幌ユニバーシアード冬季大会(1991年)などで通訳業務に従事した。このほか、1992～2006年度にはNPO法人「チェルノブイリへのかけはし」のボランティア活動に協力した。ベラルーシ共和国の被爆二世が札幌圏の里親家庭で転地療養する際の通訳業務、手紙の翻訳などを担当した。1994年度には、里親家庭の要請に応じて、学生が和露日常会話辞典を自費出版している(斉藤貴文、土屋あかね著『プスチャーク』、600語収録、A5版110頁)。2001～2008年度には、里親活動に長年協力していた本学職員夫妻の主導により、学生有志が実行委員会を組織して「チェルノブイリの子供たち歓迎会」が実施され、餅つき、盆踊り、書道、折り紙、紙芝居などの日本文化体験交流が行われた。
 - 12 札幌圏では、2002年度に策定された「札幌市国際化推進プラン」に基づき、市民主体の国際化が進められた。本事業の研修員受け入れもその一環である。
 - 13 さらに、もう1つの課題として、国や自治体の政策に受入先の事業が容易に左右される場合、ボランティア通訳活動の機会の均等性が失われ、学年間で不均衡が生じる危険性が指摘できる。2013年度の北方四島交流事業では、政府による事業見直しを理由にインターンシップ協定が締結されず、四島交流でのOJTを希望していた留学経験者の多くが参加できない事態となった。派遣側には学年間格差を未然に防ぐ対策も求められる。
 - 14 ボランティア通訳活動に参加した卒業生のおもな進路は以下のとおり。行政機関(外務省、在ロシア日本領事館、海上保安庁、北海道警察、岐阜県警察)、地方自治体(根室市役所、上士幌町役場)、ロシア関連企業・商社(大陸貿易、イスクラ産業、バルテック・トレード、横浜通商、JIC旅行センター、FECマネージメント、G.I.プラン、ユニオンスター、日本食研ホールディングス、小樽倉庫、加藤水産)、大学院(札幌大学、北海道大学)など。
 - 15 「ロシア語研究会」は1972年に創部され、約30年間活動した。初代部長は美水正一、副部長は粕谷隆夫の各氏。創部当初の部員数は7名ほどだったが、最盛期には50名を超え、会話班、文法班、文学講読班、時事講読班の4班で活動した。企画係がレクリエーション(支笏湖バス遠足、ロシア語小樽合宿、コンパ)を担当したほか、語劇(『別荘にて』、『結婚申込み』、『検察官』、『どん底』)の上演、大学祭での模擬店出店など、多彩な活動を展開した。

- 16 「ユースフォーラム」は1990年の創部で、露英日3カ国語学生新聞「Youth Forum News」(1991年創刊)を年2回発行している。
- 17 本専攻生が翻訳に協力した主なボランティア事業は以下のとおり。北海道とのタイアップによる赤れんが庁舎展示解説(2006年度)、北海道遺産案内パンフレット(2008年度)、札幌市立山の手養護学校高等部制作の紙芝居と絵本(2008年度、ベラルーシの被爆二世に贈呈)、木材関連企業のホームページなど。ボランティア通訳活動については註11、および本文表5を参照。
- 18 近年の新入生の出身地は、熊本、佐賀、広島、兵庫、大阪、三重、奈良、愛知、栃木、岐阜、群馬、茨城、神奈川、東京、千葉、宮城、福島、秋田、青森などの各都府県、および北海道。
- 19 草創期の本専攻や創部当時の「ロシア語研究会」については資料が乏しく、本学第6期生の山田隆先生に『露西亜語研究会誌』の情報等、詳しいご教示をいただいた。